

有馬俊一の東京音楽学校甲種師範科卒業後の音楽活動の再評価 — 熊本県立第一高等学校における合唱指導について —

国府 華子

音楽教育講座

Kosyu-shihanka of Tokyo Academy of Music of Shun-ichi ARIMA Re-evaluation of Musical Activities after Graduation

Hanako KOU

Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本研究の目的は、東京音楽学校甲種師範科を卒業し、地方の音楽教員となった者の音楽活動を通して、甲種師範科の卒業生が果たした役割を明らかにしていくことと、熊本県における合唱活動の史的展開を明らかにすることである。

教員養成機関としての甲種師範科については、すでにこれまでにいくつかの先行研究がある¹が、この甲種師範科を卒業した者たちが、その後どのように音楽教育に貢献していったのかについては、未だ明らかにされていない²。当時の音楽教育の状況を鑑みても、地方の音楽教育を支えていたのは、甲種師範科を卒業して地方へ行き、または、出身地に戻り、音楽を広め、地元の音楽教育を担った師範科出身の者たちであったと考えられる。特に、地方の師範学校の音楽教員として派遣された者たちが、その地方でどのような音楽活動を行なったのかということは、甲種師範科で学んだことがどのように地方に浸透していったのかという道筋を明らかにすることにも繋がるだろう。

これまでの研究において、甲種師範科を昭和11年に卒業し、熊本県において長年にわたり音楽教育に貢献してきた梅澤信一を取り上げ、彼のいくつかの音楽活動の中から、熊本県下の校歌を多数作曲したことに焦点をあて、その分析を行った³。故郷の音楽の教員として赴任した梅澤信一は、多数の校歌を作曲するという活動を通して、師範学校・大学での音楽教育だけでなく、作曲という領域においても地域に大きな貢献をしたと言える。梅澤が作曲した校歌の一番の特徴は、頻繁に入れ替わる拍子であるが、その目的は、曲調の変化をより効果的にするためと、歌詞の言葉のリズムを大切に、言葉が自然に聞こえるメロディーとリズムを与えるためであったと考えられる。

本稿では、昭和12年に甲種師範科を卒業し、昭和15年に熊本県立第一高等女学校（現、熊本県立第一高等学校）⁴に赴任した有馬俊一の音楽活動を取り上げる。梅澤は昭和11年に、そして有馬はその1年後の昭和12年に甲種師範科を卒業している。卒業年度は梅澤の方が早いですが、熊本への赴任は、有馬が昭和15年であり、梅澤が昭和20年となっている。同時期に熊本県において音楽教育に従事していたのである。

今回は特に、有馬が熊本県立第一高等学校に赴任した当初から退職するまで力を注いでいた音楽部（合唱部）の活動に焦点をあて、資料と当時の教え子たちへの聞き取り調査⁵から、有馬が取り組んだ音楽教育の一端を明らかにしたい。

1 有馬俊一の略歴と音楽活動

有馬は、宮崎県の師範学校を卒業後すぐに、東京音楽学校甲種師範科に入学している。本人の回想によると（1997、pp. 38-39）、小学校の先生になっても、書道と体操が不得手で教えられないと考え、学費を返還しなくてもよい東京音楽学校甲種師範科を目指すことにしたのだそう。甲種師範科卒業後は、滋賀県師範学校に勤めた後、後輩からの依頼というかたちで熊本県立第一高等女学校に赴任し、34年間という長い期間在職することになる。第一高等学校退職後は尚絅大学に勤めるが、そのかわりで、第一高等学校のOGが母体となるコーロ・フィオーレを昭和51年に発足し、合唱指導に携わった。

《略歴》

大正4年	宮崎県生まれ
昭和9年	宮崎県師範学校卒業
昭和12年	東京音楽学校甲種師範科卒業

昭和12年 滋賀県師範学校教諭
 昭和15年 熊本県立第一高等女学校教諭
 昭和49年 熊本県立第一高等学校退職
 昭和49年 尚綱大学教授
 昭和60年 尚綱大学退職

また、全日本合唱連盟九州支部長、熊本県おかさ
 んコーラス連盟会長などを歴任し、合唱コンクールの
 審査などにも数多く携わり、熊本の合唱教育に尽力し
 たのである。

ところで、昭和15年頃の熊本県での合唱活動は、ど
 のようなものであったのだろうか。昭和22年には、
 「GKこども唱歌隊」（現在の「NHK熊本児童合唱団」）
 が発足している。梅澤信一が指導していた、ママさん
 コーラスグループ「マミーコール」の前身となるグルー
 プの練習が始まったのも、昭和22年あたりである。ま
 た、昭和25年には岩津範和が指導していた、九州学院
 高校グリークラブのOBによる男声合唱「デメテル・
 コール」が発足している。指導者やメンバーは移り変
 わっているが、「マミーコール」と「デメテル・コー
 ル」は現在も活動を続けている団体である。

昭和21年に発足した、熊本合唱連盟の初代理事で
 あった、梅澤信一、岩津範和、有馬俊一が、当時の熊
 本の合唱活動を引っ張っていたと言ってよいだろう。
 中でも、第一高等学校音楽部を全国レベルに引き上げ
 た有馬の指導は、熊本の合唱の発展に大きく貢献した
 と考えられる。

2 第一高等学校での合唱指導

第一高等学校の音楽部は、有馬が赴任した昭和15
 年に発足し、活動が始まっている。有馬自身が「34年
 間の在職中に最も力を入れたのは、合唱指導だった。」
 (1997, p. 109) と述べているように、まさに音楽活動
 の中心は合唱指導であったと言える。そして、その理
 由について、「ハーモニーを自分で創り、音楽を全体と
 して味わうことのできる合唱こそ、音楽教育の基礎で
 あると信じたからである。」(1997, p. 109) と述べて
 おり、合唱こそが音楽の力を育てる土台となると考え
 ていたことがわかる。この音楽部のコンクール歴が実
 に輝かしいものである(表1)。まさに全国大会出場の
 常連校と言える実力をつけ、現在にも繋がる第一高等
 学校の合唱の伝統をつくりあげたと言える。この当時
 の指導について、後の雑誌の取材の中で有馬は以下の
 ように答えている。

大事なことは、最初に高いレベルのものをつくり上
 げること。それさえできればあとに続く者は自然に
 いい歌を聞き、いい耳をもち、いい環境に置かれる
 から、自分達も目標にして頑張る。(1990, p. 6)

表1 第一高等学校音楽部のコンクール受賞歴

年	西部合唱コンクール	全日本合唱 コンクール
昭和26年	第6回高校の部1位	第4回高校の部4位
昭和28年	第8回高校の部2位	
昭和29年	第9回高校の部2位	
昭和30年	第10回高校の部2位	
昭和31年	第11回高校の部3位	
昭和32年	第12回高校の部2位	
昭和33年	第13回高校の部1位	第11回高校の部4位
昭和34年	第14回高校の部3位	
昭和35年	第15回高校の部1位	第13回高校の部3位
昭和36年	第16回高校の部2位	
昭和37年	第17回高校の部2位	
昭和38年	第18回高校の部2位	
昭和39年	第19回高校の部2位	
昭和40年	第20回高校の部1位	第18回高校の部3位
昭和41年	第21回高校の部2位	
昭和42年	第22回高校の部2位	
昭和43年	第23回高校の部2位	
昭和44年	第24回高校の部優勝	第22回高校の部5位
昭和45年	第25回高校の部優勝	第23回高校の部金賞
昭和46年	第26回高校の部金賞	第24回高校の部銅賞
昭和47年	第27回高校の部金賞	第25回高校の部出場
昭和48年	第28回高校の部金賞	第26回高校の部辞退

(第一高等学校「清香会」資料室展示資料より転載)

有馬の中にすでに「高いレベル」の合唱という理想的
 な姿が思い描かれていたのだと推測できる。そして、
 それは指導だけでなく、環境も非常に重要な役割を果
 たすと考えていたのだ。

それは、例えば練習時間の取り方にもあらわれている。
 聞き取り調査によると、実際の練習は昼休みの15
 ～20分の時間のみであり(Y、O)、部員達は所謂早弁
 をして、練習の時間を確保していたそうである。これ
 は、「無意味なくかえしは時間の浪費にすぎない。要
 は集中力。内容を重視し、適確なアドバイスさえ与え
 れば、時間は短くても十分な効果があげられる。特に
 合唱は指導者次第」(1990, p. 6) という有馬の考えに
 基づいている。

また、誰でも部員になれたわけではなく、オーディ
 ションがあったそうである。その一方で、Yのように
 有馬から声をかけられて入部した部員も少なからずい
 たようであり、有馬の勧誘も積極的に行われていたと
 思われる。Oは「授業の中の歌のテストが、男子にとっ
 ては合唱部のテストだったような気がする」と語って
 いた。いずれにしても、部員たちは最初から有馬のお
 眼鏡になかったメンバーが揃えられていた、というこ
 とになるだろう。

実際の指導については、「発声について注意された
 記憶はない。個人で声楽を習っていたメンバーが結構

いたから、必要なかったのではないか」(O)という話があった。有馬が在職中、第一高等学校には有馬の他に音楽の非常勤講師⁶が存在した。途中、途切れている期間もあるのだが、この非常勤講師が声楽を専門とする講師だったのである。昭和25年から昭和32年まで勤めた新圭子は、有馬から誘われて非常勤になったと述べている(1997)。新は、東京音楽学校の声楽に進み、毎日音楽コンクールに入賞するほどの実力者である。声楽のことについては非常勤講師に指導してもらい、自身は音楽を指導することに専念しようとしていたのだろう。これも、「環境を整える」という有馬の信念によるものだったのではないかと推測できる。

3 選曲について

有馬の選曲について、インタビューの中でYは「ピアノを弾いていても、ほれほれするようないい曲が多くて、のめりこんで演奏することができた」と述べている。「いい曲」であるかどうかの判断は個々の好みもあり難しいところだが、演奏する者にとって大きな影響を与える要素である。有馬の選曲の視点はどこにあったのだろうか。

インタビューの中ではさらに、「先生は新しもの好きだった」(Y)という話が聞かれた。それは、第一高等学校時代だけでなく、コーロ・フィオーレの活動の中でも感じられることだったようである。コンクールで取り組んだ自由曲を見ても、作品が発表されてから数年で取り上げているものが数多く見られる。

例えば、昭和37年に選曲した大中恩作曲の《月のうさぎ》は、昭和35年の作品である。全国大会では、同年、もう1校選曲しており、次の年も選曲されている(『全日本合唱連盟30年史』1977, pp. 85-87)。新しい曲へのアンテナを張り巡らせておかなければ、できないことであり、楽曲の研究や練習する時間を考えれば、積極的な取り組みであると言える。しかし、この傾向は有馬に限ったことではなく、当時のコンクールの傾向であった考えるべきだろう。例えば、有馬も昭和44年に選曲している《葡萄の歌》は、宮城県第一女子高校の合唱指揮者の委嘱により、湯山昭によって昭和40年に作曲された作品である。その年に宮城県第一女子高校が歌い、全国2位になったことで、短期間のうちに全国に広まったのだ(戸ノ下達也・横山琢哉2011, p. 219)。

コンクールで良い成績を取めることによって、そこで歌われた作品が全国に広まるという流れがあったと言える。いずれにしても、合唱指導者は、アンテナを張り巡らせて、すでに歌われている中からよい曲がないか、また、新しく発表される曲でよい曲がないか、探していたのである。

表2 西部合唱コンクールで第一高等学校が演奏した自由曲

年	曲目	作曲者
昭和26年	わすれな草	平井保喜
昭和28年	別離の歌	チャイコフスキー
昭和29年	秋のうた	中田喜直
昭和30年	不明	
昭和31年	春の声	シュトラウス
昭和32年	春のワルツ	アルディティ
昭和33年	春のワルツ	アルディティ
昭和34年	春のよろこび	ウィルソン
昭和35年	アダムとイブ	中田喜直
昭和36年	仮面舞踏会	J.シュトラウス
昭和37年	月のうさぎ	大中 恩
昭和38年	天使の合唱	ベートーヴェン
昭和39年	聖なる万軍の主	グノー
昭和40年	アダムとイブ	中田喜直
昭和41年	或る風に寄せて	三善 晃
昭和42年	「愛の風船」より「母のように」「ことばってすてきなもの」「風船屋さんになりたいむすめ」	大中 恩
昭和43年	組曲「北の歌」より 雪の魔法	中田喜直
昭和44年	組曲「葡萄の歌」より 宝石	湯山 昭
昭和45年	三つの九州民謡による演奏会用女声合唱曲	小林秀雄
昭和46年	組曲「北の歌」より 夏の海	中田喜直
昭和47年	組曲「霧」より 灰色の朝、よみがえる光	中田喜直
昭和48年	組曲「光る砂漠」より「イ、ほたるは星になった」「口、ふるさと」	萩原英彦

(『西部合唱連盟30年史』 pp. 73-129より筆者が作成)

単に新しい曲、コンクール向きの曲という選曲の視点だけではなく、それぞれの作曲家がもつ作風や特徴をとらえた上での選曲の視点があったのだろうと考えられる文章が残っている。昭和61年に開催されたコーロ・フィオーレ第6回演奏会のプログラムに掲載された、「女声合唱の流れ」と題した有馬の文章である。プログラムも「洋楽輸入時代」「昭和20年代・30年代」「昭和40年代」「昭和50年以後」と4つに分かれており、年代順に曲が配置されており、そのプログラムの説明も含めて、明治からの合唱曲の流れが記されている。歴史の流れを述べただけではなく、有馬が合唱を指導してきた経験に基づいた、作曲家や作品に対する考えが記されているように思える。

湯山昭については「新しい和音の響きと近代的なリズム」、高田三郎については「あくまで詩の内容と言葉の重要さを追求する姿勢」を大切にしなければならぬことが指摘されている。また、さらにそれに続く、三善晃、青島広志、池辺晋一郎、新実徳英といっ

た作曲家に対しては「単に『きれいな曲』とか『楽しい曲』とかでは形容しきれない、もっと深い人間の心を表す曲」という表現を用いている。いずれも、真摯に曲に向き合い、分析を重ね、理解を深めてきた有馬ならではの解釈であると言えるだろう。この文章の最後に、新しい作品の中には「到底私達の力の及ばない曲があって、必ずしも作曲家の真価を伝えるものではない曲を選ばざるを得ませんでした」という記述があり、有馬の楽曲に対する姿勢、作曲家に対する敬意が感じられる表現となっている。

その一方でインタビューでは、「先生は嫌いな作曲家がいたのよね」(Y、O)「ポップス系は苦手だったよね」(O)という話も聞かれた。作曲家や作品に対しての深い解釈があったからこそその好き嫌いだったかもしれない。

4 教え子からみた音楽教師としての有馬

部活動である合唱指導について見てきたが、部活動の土台になるものとして音楽授業があったことも忘れてはならない。授業については、とても楽しかった(O、長野、1997)ことが、インタビューでも教え子の回想でも語られている。その楽しさとは、有馬の話にあったようだ。思い出話や音楽会の感想など、授業の内容の合間の、一見授業の内容とは関係ないような雑談が印象に残っているようであった。この話が授業をスムーズに進め、生徒たちの気持ちを音楽に向けることに役立っていたからこそ、印象に残っているのだろう。

音楽授業の内容については、インタビューでは鑑賞の内容が特に印象に残っていると語られた(O、A)。鑑賞を行う際には、主題をピアノで弾いて確認をし、全体の構成を学んでから鑑賞を行っていた。「スコアを見ながら聴いた」「試験にも出ていたような気がする」(A)と語られているように、理論的な理解にもかなり力を入れていたことがうかがえる。

Oは当時の音楽授業や合唱指導について、「計画的で継続的」であり、「教材が厳選」されたものであったと振り返っている。のちに音楽教師になったOにとって、有馬の指導はお手本となるものであった。

ピアニストでもあるYは、卒業後もコーロ・フィオーレの伴奏者として、長年有馬と共に音楽活動を行ってきた人物である。高校生当時のことよりも、コーロ・フィオーレの伴奏者の時の印象の方が強く残っている、と述べたうえで、「選曲がすばらしかった、そして、曲の解釈やフレーズの捉え方がすばらしく、卓越した音楽能力をもっていた」と振り返った。特に「感情などを楽譜から読み解くことはとても上手だった」と語り、それは自分自身のピアノ演奏やピアノ指導にも生かされるものであったそうだ。

Aは、教え子でもあり家族でもあるが、有馬について、家でもずっと教師のようであったと述べている。また、常に音楽のことを考えており、「コンクールが近くなって来ると、ごはん食べながらでも、こうやって(お箸を指揮棒のようにふっていた)ました」と述べている。有馬の、楽曲を追求し続け、音楽に向き合い続けた姿勢がわかるエピソードである。

まとめ

有馬の功績は、熊本県立第一高等学校の合唱を全国レベルにまで育て上げ、その伝統を築き、熊本の合唱活動をひっぱってきたことにあると言ってよいだろう。最初に高いレベルのものをつくりあげれば、後の者はそれに続いていくという有馬の考えは、第一高等学校に留まるものではなく、熊本全体の合唱に引き継がれていったのである。

そしてその合唱指導は、有馬の作曲家や作品に真摯に向き合い、追究し続けることによって得られた深い理解と解釈によって生み出されたものであると考えられる。また、自身の指導だけでなく、環境を整えることにも心を配り、広い視野で合唱教育を支えたのである。新(1997)は、有馬のこのような音楽性について、「木下保先生の影響によるアカデミックな格調の高さ」があったと述べている。新も木下の門下であり、同じ流れを感じていたのかもしれない。

このような指導は、多くの教え子たちが音楽の道に進んだことや、今でもOGの合唱団に参加して音楽に関わっているところからも大きな影響を与えたことがわかる。今後は、有馬の教え子たちの音楽活動についても明らかにしていくと共に、同時期に熊本の合唱を支えた岩津範和の音楽活動についても明らかにしていきたい。

(本論文は、平成28年度の「日本音楽教育史学会」において口頭発表したものの基に、まとめなおしたものである。)

注

- 1 先行研究としては以下のものがあげられる。山住正巳(1967)『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会。田浦桂三編(1980)『近代日本音楽教育史1』学文社。坂本麻実子(2006)『明治中等音楽教員の研究—「田舎教師」とその時代—』風間書房。鈴木慎一郎(2006)『昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究』博士論文(兵庫教育大学大学院)。財団法人芸術研究振興財団 東京芸術大学百年史編集委員会編(2003)『東京芸術大学百年史東京音楽学校篇第二巻』音楽之友社。坂本(2012)は、甲種師範科が演奏教育を重視し、特にピアノ教育が大きな進展を見せ、成果をあげたことについて述べている。また、鈴木(2004)は音楽の教員になることが

- 義務づけられていたコースであったにもかかわらず、『音楽教授法』や教育実習が軽視されていたように思われる』（p. 52）と、実際のカリキュラムでは教育についての内容が充分とは言えない状況であったことに言及している。
- 2 坂本（2000）が明治時代の東京音楽学校の卒業生が、全国の師範学校の音楽教員としてどのように配置されたについて論述している。これにより、どのように東京音楽学校の西洋音楽が全国へ広まったのかが明らかとなっている。しかし、ここでは実際の音楽活動にまでは触れられていない。
 - 3 拙著「梅澤信一の東京音楽学校甲種師範科卒業後の音楽活動の再評価」『愛知教育大学研究報告 第65輯（芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編）』pp. 11-15。
 - 4 熊本県立第一高等学校は、明治36年 熊本県立高等女学校として設置され、大正10年、熊本県立第一高等女学校となる。その際に、熊本県立第二女学校も併設される。昭和23年には、熊本県立第一高等女学校と熊本県立第二女学校を合併し、熊本県立女子高等学校となる。そして、昭和24年現在の熊本県立第一高等学校と改称される。
 - 5 3名の方へ聞き取り調査を行った。
 - Yさん 第一高等学校卒業（昭和40年入学）
コーロ・フィオーレ伴奏者（14年間）2016年3月25日熊本市内にてインタビュー実施。
 - Oさん 第一高等学校卒業（昭和27年入学）
現在、OG合唱団を指導。2016年3月25日熊本市内にてインタビュー実施。
 - Aさん 有馬俊一の娘 第一高等学校卒業（昭和38年入学）音楽部ではなかったが、伴奏をしていた。2016年4月2日熊本市内にてインタビュー実施。
 - 6 昭和22年から昭和45年の間に6名の非常勤講師が勤めている。（しらうめコンサートプログラム、2003年より）

〈プログラム資料〉

- コーロ・フィオーレ第6回演奏会「女声合唱50年史」昭和63年7月23日（土）産業文化会館大ホール。
 しらうめコンサート 熊本県立第一高等学校 新制高校発足50周年記念 平成9年10月12日（日）熊本県立劇場 コンサートホール。
 しらうめコンサート 熊本県立第一高等学校 創立100周年記念 平成15年10月12日（日）熊本県立劇場。

（2016年9月23日受理）

引用文献

- 新圭子（1997）「有馬先生とわたし」〈プログラム〉しらうめコンサート 熊本県立第一高等学校 新制高校発足50周年記念 平成9年10月12日（日）熊本県立劇場 コンサートホール。
 有馬俊一（1997）『追憶のバラード』熊本日日新聞情報文化センター。
 甲斐ゆみ子（1990）「青少年期に芸術する心を刻む」『熊本文化』第186号、p. 6。
 坂本麻実子（2000）「明治時代の師範学校への音楽教員の配置」『富山大学教育学部紀要』54号、pp. 49-61。
 坂本麻実子（2012）「東京音楽学校甲種師範科のピアノ教育とその成果—生徒が出演した演奏会から—」『桐朋学園大学研究紀要』38号、pp. 75-87。
 鈴木慎一郎（2004）「東京音楽学校甲種師範科の実態 —長坂幸子氏からの聞き取りを通して—」『関西楽理研究』第21巻、pp. 43-56。
 戸ノ下達也・横山琢哉（2011）『日本の合唱史』青弓社。
 長野浩子（1997）「私のよろこび 第一高校」〈プログラム〉しらうめコンサート 熊本県立第一高等学校 新制高校発足50周年記念 平成9年10月12日（日）熊本県立劇場 コンサートホール。
 『西部合唱連盟30年史』（1975）昭和50年。
 『全日本合唱連盟30年史』（1977）昭和52年。